

「心の声」

川越厚さんが執筆された『ヒロシマ遡上の旅―父に捧げるレクイエム―』という本を頂戴し読みました。昨年 2024 年 12 月に発刊されたばかりです。

著者の川越さんの両親は 1945 年 8 月 6 日に広島に投下された原子爆弾の被爆者であり、壮絶な状況下を生き抜いた両親の足跡を旅しながら検証された本です。

心に重く響く本でした。時に読み進めるのが苦しくなる内容でしたが私にとって大切な本となりました。

川越さんは在宅ホスピスケアのパイオニア医師です。病気で亡くなった患者さんの家族のケアについて書かれていました。

「表面的な慰めの言葉はかえって遺族のこころを傷つけるし、悲しみに沈んでいる遺族を勇気づけようとする事など論外だ。遺族ケアの原則は、遺族を一定期間そっと温かく見守ることだ。ホスピスケアの場合、どんなにその死が納得できるものであっても、遺族が立ち直るためには最低 1 年間が必要だ。」と・・・

さらにこう続きます。「ヒロシマ原爆の生存被爆者は目にした地獄を語らなかつたのではなく、語れなかつたのです。「語れる」ようになるまでには、40 年の歳月が必要だったので。生存被爆者の苦しみは彼らが貫いた「沈黙」に秘められていた。それが被爆者の心だった。わたしがそのことに気づいたとき、父はこの世にいなかった。」・・・

川越さんは父親が原爆の事をなぜ語らないのか理解することが出来なかつたが今なら少し理解出来るような気がする。ヒロシマへの遡上の旅をしながら思いを綴られてい

ました。

私自身の事を考えてみました。私も大切な弟を亡くした直後に心配して電話をかけてきてくださった司祭さんや信徒の皆さんからの携帯電話の着信に戸惑い、電話に出られませんでした。優しい言葉をかけて頂くことは嬉しく有り難いのですが、苦しくもありました。本当に複雑な心境でした。一人にしてほしいと正直思いました。

大切な愛する人の死を受け入れるためには「時間」と「沈黙」の時間が確かに必要です。東北教区では『東日本大震災証言集』を地震発生から 10 年の時に発行しました。

今読み返してみてもとても重い内容です。そして震災から 14 年経過した今も「語ることの出来ない」苦しみを抱えている方もたくさんいらっしゃることを決して忘れてはいけなかつたと今思います。日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ「神の声に、人々の声に、世界の人々の声に」耳を傾けようを私なりにどう応答しようかと考えた時にお互いの思いを「聴く」ことも大事にしながら、「語ることができない」沈黙の背後にある「心の声」にも耳を傾けたいと思います。

(司祭 越山哲也)